

詩斗燐★PDF版特別号

小林ブルー美由起

春療治

あっという間に燃え上がった春が
ぷすぷすと胞子を噴いている
花萼は小さな手を広げてきらめき
ポピーはリズムを刻む
木香薔薇はむくむく増殖し
夕暮れには少しずつ雲になる
青く透き通った春の乳房が
空からいくつも降りてくる
むずかる世界をゆるゆると揺すり
泣き叫ぶ口に乳首をあてがう
世界を調律しようと
春が壊れながら
微笑んでいる

ハンカチ

暗い部屋のなかで
母が泣いていた
しきりにハンカチで
涙をぬぐっているらしかった
丸い背中が
ほのかな月明かりに
ぼんやりと浮かび上がり
ふるえていた
たまらずに電気を点けると
ハンカチだけがあった
一枚の冷たい泉だった
目を瞑るように電気を消した
畳の上にハンカチが灯っていた
跪いて水面を覗く
母の顔が見えてくる気がして
あわてて闇へたたみこんだ
指先から冷たく発光しはじめてしまわないように
水へ戻ってしまわないように
すばやく
ただすばやく

夕暮れ

夕日が好きだ
夕焼けが好きだ
胸いっぱい吸い込んで
夜の間痩せしてまう魂に
煙草から煙草へ火を移すように
胸に灯す
朝への長い導火線に
火を付けよう
過去と未来が
口づけをしている時間
燃えている
魔法の光が

月光液

化粧水を瓶に詰め替える夜
少し白濁した月光が
するすると瓶に吸い込まれてゆく
肌のきめ細かさや弾力が
年齢とともに失われてゆくことを
何千年も繰り返してきたのに
諦めきれない
鏡の中の顔は
いつか消える顔
両手に月光をひろげて
顔を浸す
母の顔と出会う

詩斗燐 PDF版特別号

小林ブルー美由起

二〇二五年十二月二十三日 発行